

五平さん

住 谷 悦 治

1

全同志社人の信仰と希望と勇氣のメッカであるあの東山若王子山頂の新島襄先生の墓地。その入口の門の内側のすぐ右側の片隅に小さい墓一基が、新島先生の、多くの墓参者にほとんど気づかれないほどささやかに建てられてあります。近寄って見ると、正面に「松本五平之墓」と書かれてあり、側面に「同志社校友有志建之」と記るされてあります。もはやその字もさだかには読みにくいほどであります。新島先生の墓碑に向い会って、この小さい墓石は、まことにつつましやかに、新島先生の墓地の門番をしているかのようです。

松本五平——いったいこの墓の主は同志社にとつてどのような人なのでしょう。どうして世間的には、その名も知られていないこの人のお墓が、新島先生の塋域に建てられているのでしょうか。新島先生の墓参をされた同志社の人びと、多くの男女学生・生徒たちは、この小さい墓に気づいているでしょうか。またそれに気づいたとしても、不思議に思わないのでしょうか。あるいは、この小さい墓の主について考えたことがあるのでしょうか。この墓の主、松本五平さんにとつては、後世の人びとが、少しも気づかなくとも、何ともここにかけないに違いありません。むしろ、そのまま、静かにそっとしておいて欲しいかもしれません。ダイオージェネスが、

アレキサンダー大王に喧いたように五平さんの墓は「そこに立ちふさがらないで下さい。新島先生のお墓が見えなくなりますから。」と喧くかもしれません。

新島先生の墓地には、同志社にとつて功績のある立派な人びと。新島先生と同志社創立のはじめから先生とともに骨身を削って苦楽・辛勞を共にしつつ藤の道を歩んだ有名な人びと。わたくしたちが夢にも忘れてならぬ同志社にとつて大切な、同志社精神を実行し、築きあげて下さった人びと。あるいは同志社の名とともにいろいろの意味からして想い出の種となる人びと。この九十年の光榮ある同志社の歴史を受けつぎ、これを守り、発展させてゆかねばならないわたくしたち後輩を感

奮興起せしめる先輩たちの墓が立ちならんでおられます。新島先生のお墓を正面に、その右側には創立当時から新島先生援け協した情熱のキリスト者デビス先生、東南の隅に同志社女学校の母ミス・デントン、蘇峰 徳富猪一郎、並んで正面に、新島先生と異体同身的に協力した山本寛馬翁、そのほかたくさん立派な人びと大先輩の墓石が並んでいます。

2

わたくしは今から四十三年前(一九二二年)に同志社大学法学部の助手となったのですが、それから数年間の間に、いつとはなしに、誰れからともなく、「五平さん」の伝説を聞いたのでした。「同志社五十年史」を播くと、その「人物篇」が和田琳熊教授によって書かれており、同志社の校長・社長(または総長)、デビス、山本寛馬、横井時雄、片岡健吉、ラーネッド、山崎為徳、森田久万人という同志社における歴史的な人物に加えられて、最後に松本五平が挙げられているのですから驚きました。もちろん、同志社の歴史上功績のある人びとは、まだまだいくらでも挙げられようし、社史に欠くことのできない

人物が多いのでありますが、校僕松本五平を探りあげたのは、何んといつても和田琳熊先生の卓見でありましょう。いわゆる同志社「外史」ともなるべき記事を読んだり聞いたりし、徳富蘇峰、安部磯雄その他、いく人かの大先輩の校友たちからもたびたび「五平さんの」伝説を聞いています。新島先生の御在世のころ、五平という校僕がいて小使とか門番をしていたが、新島先生から大変親愛されていたという。そのころの生徒が、この校僕の五平を、おい五平あれをしろ、これをしろ、と言って五平、五平と呼び捨てにしていたので、ある日、ある時、この五平が憤然として、「お前さんたちはわしを五平、五平と呼び捨てにしているが、新島先生は、わたしを五平さん、五平さんと呼んでくれているぞ」と言って生徒をたしなめたというのです。わたくしはこの伝説をきくこと久し、で、多くの同志社人とともに、新島先生がいかにいわゆる平民主義者であり、いまいう民主主義に徹底した先生であり、いかに人間尊重とか、人間にたいする平等な考え方が身につけていて、それが先生の慣性となっていたため校僕をも五平さん、五平さんと優しく呼んで、

平等の人間として相對していた素晴らしい新島先生の平民主義としての物語であると、こう考えていたのであります。そのことを人とも語り、新聞にも書き、新島先生が人間を平等に尊重された美談として仮りにこれを「五平さん主義」と言って自己反省の手懸りとしていたのであります。しかし、五平さんの伝説をきいたのみでなく、若王子の新島先生の墓地に墓参するたびに、ささやかな「松本五平之墓」を眺め、一礼し、松本五平という人は、ほんとうに、現実に、どのような人間であつたのだろうか、いつもその真相を知ろうと考えておりました。『同志社五十年史』に依拠しつつ、松本五平さんという人物を考え、偲んでみたいと思います。これについては同志社を熱愛している校友若本博民氏から教えられたことが多いのであります。いつも眼が廻るような多忙のために書き綴ることができずに今日にいたつたわけでありませう。

3

五平さんという人は、本名は墓石にあるように松本五平であります。天保年間に信州に生れ、幼名は作太郎といいました。死亡し

たのは、明治三十二年（一八九九）七月で年齢は六十余歳であつたと伝えられておりますが年齢は正確には分りません。亀山藩の足輕の松本家の養子となつて、松本の姓を名乗り松本宗之と稱したといふのですから、徳川時代のこととて、ただ作太郎が松本家に入る前は姓は問題にもならなかつたのでしようか。

昔の同志社人で、忠僕五平といへば、彼を知る者一人として一種言い難い懐かしさとか親愛の情を覚えぬ者はないようです。五平さんは幼少のころから体軀が人並みはずれて短小だったので、両親は到底一人前の男としては世に立つことが出来ないと思案にくれた方がよく、僧侶にでもして身を立てさせた方がよいと考え、彼をあるお寺に托しました。

作太郎少年は、このように生来、体軀が頗る短小で四尺余りしかなかつたそうです。安部磯雄著、『青年の理想』の「其の時代の新島先生と学生生活」という一文の中に「同志社には私共の入学時代（明治十五年ごろ）から、先生の人氣を集めた一人の小使が居た。名は松本五平といつて実に愛嬌のある一寸法師であつた」といふ一節があります。「愛嬌のある」人物であつて、「一寸法師」などともいわ

れていたのでした。さらに亀山昇という同志社第三回の卒業生で、大西祝博士、原田助社長などと同じクラスの大先輩が、新島先生と五平さんの追懷を語つた言葉に「新島先生について想い起すことは、先生は誰れにでも決して呼び捨てになさらなかつたことである。五平という小使にでも、いつもやさしく『五平さん』と呼ばれた。この男は特別に小男で面白い性質を有つていたので、当時生徒は彼のことを『エスキモー』と言つた」といっております。それにもかかわらず、この五平さんは、実に立派な人間として成長したことは、後にやや詳しく述べるとおりであります。ところで、この少年五平は僧侶になることを嫌つてそこを脱走し、江戸に逃げて行つた。そのころうするうちに人買いの手に渡り、廻り廻つて丹波の亀山藩の堀金太夫（元同志社の堀貞一牧師の祖父）の下男になつた。それは嘉永五、六年のことであつたが、安政六年に堀家とともに大阪に移り、文久元年には再び江戸に転住することになつた。その後、亀山藩の足輕の松本家の養子となり、松本宗之と名乗り、慶応二年亀山（今の亀岡）に移つた。明治十二年、不幸にも養家の者が皆ん

な死し、彼独り残されて糊口に窮して居つた時、同志社の賄方に雇われ、後、校僕となり、同志社名物の一つとなつた。明治三十二年七月六十余歳を以て永眠したが、同志社に勤むること実に二十年であつた。

4

五平さんは身長僅かに四尺余、それで大きい丸い頭の持主で、どう見ても滑稽的の出来て居た。

しかしこの五平さんを名物男にしたのはそういう身体的特徴のほかユーモアがあり、性質が純朴玲瓏であつて、滑稽の裏面には極めて真面目なものがあつたためであつた。何といつても幕末の荒い社会にもまれたので底力のある武士的良心といつたようなものを持つていて、それを活躍させて、新島先生と同志社のために誠実勤勉に労働した。彼が尊敬した人物は、地位の高い人でもなければ、単なる学者でもなく、唯高潔にして義に勇む人だけであつた。随つて彼が新島先生を尊敬したことは非常なものであつた。新島先生の姿を見ると、五平さんは恰も電氣に打たれたかのごとく、箒を捨て、鉢巻を取り、精神の籠つ

た敬礼をするのが常であつたといわれている。また五平さんが洗礼を受けるに至つた主な動機は、自分が死後においても新島先生の所へ行くことの出来るようにということであつた。また五平さんが死の床に就いたとき、希つた唯一の遺言は、自分が死んだら新島先生の墓側に葬つて貰いたいということであつた。

五平さんはまた同志社のためには少しの努力も惜まなかつた。用を命ぜられれば、響の声に応ずるがごとくであつた。彼は一方からいへば生徒なんかほとんども眼中にないかのようになつた。生徒が何か悪戯をした場合には



「同志社の生徒はそんな事をするものではない」ときつぱりとキメツケたなどということはどうしても単なる小使さんでもなく、校僕でもなく、門衛でもなく、立派な一人の教育者であつたと言ひ得るでしょう。のみならず五平さんは、伝えられるところによると、しばしば広告案隊を真似て口笛を吹き、置いて学生を集め、彼らに向つて懸河の弁を揮い、多大の感動を与へ、そして演説が終れば再び口笛と盟の合奏で少年生徒たちを後に従えて行進を始め、人びとをして心からの笑をなさしめたという。かくのごとく五平さんという人物は滑稽と真面目との両面の面白い調和のあつた人柄であつたが、本来まじめが主、ユーモアが従であつたことは言うまでもない。五平さんの語るところは何時も正義の声であつた。不倫なる行為をなす者も五平さんの鋭い諷刺の前には肅然として襟を正さざるを得なかつたということであります。いづれにしても五平さんは、幕末・明治の人にある共通の一本の筋金の通つていた人物であつたと思われまふ。たとえ四尺の一寸法師といわれても、粗暴な不当な行動をキメつけるというようなことは、なかなか出来難いことで

あります。そういう性格が、また新島先生から愛されたのでありまふ。

五平さんの体軀が短小であつたということは、その実証を岩本博民氏からも得ております。博民氏の嚴父活泉井上善吉先生が、五平さんと同郷であり、また海老名総長るときちャプレンとして同志社の宗教教育部面を担当した明治十三年第二期の先輩堀貞一（金太郎）牧師がまだ同志社生徒のころ岩本氏の祖父・優れた教育家井上堰水先生の創立した府下丹波の発蒙館を度たび訪れたとき、親族をすべて失つた松本五平の窮状を憐れみ、同志社に伴れてきて新島先生に依頼して校僕にして貰つたのだという。堀貞一牧師、岩本氏という関係で五平さんの身長、体軀の実証がわたくしたちにも具体的に明らかになつたといえるのです。

前述したように少年五平が嘉永五、六年のころ丹波の亀山藩の堀金太夫の下僕一下男、そのころに草履取りになつたので、幕末・明治の政治的・社会的動揺期に、しかも真の孤児として残されたので堀貞一学生が新島先生の許に伴れて来て、はじめは同志社の賄方に雇つて貰ひ、それから庭掃除や門番などをし

て二十年間を忠実に校僕としてすごしたのであります。四尺そこそこの小男とすれば世

の常の人ならば、劣弱感に心もヒガミ易いものにもかかわらず、岩本氏の語るところによれば、性質は明朗で純朴で玲瓏でありなかなかユーモアもあり、幕末の藩に生活した経験によつてか武士的な底力があつたという。そのような五平さんであつたから、新島先生こそは、彼のイメジが現実には顕現したことになつたのであります。そして先生と同志社のため真に陰日向なしに誠実勤勉に労働奉仕に終始したのであります。六十余歳の死の床においても新島先生の許に居りたいと遺言したといふ五平さんの気持はわたくしにも心痛きまで解ります。

後にこのことを聞き伝えた五平さんを知る校友たちが、五平さんのなきがらを新島先生の墓地に葬り、墓石を建てたのであります。わたくしは、これらの校友たちが誰れであつたかその名を今だに知らないものであります。が、ほんとうに床かしい同志社校友たちの温かい清らかな心を、わたくし同志社人は忘れてはならないのであります。あの若王子の先生の墓地に先生の墓石の側近く、永遠に

安らかに眠っていることは、五平さんの霊もさぞ満足のことと思ひます。

5

新島先生は、あの寺町の自宅から御所を抜けて歩いて同志社へ登校されました。ライネツド博士の「回顧」によつてみても、そのころ相国寺から京極小学校へ通つていた足利武千代翁の回顧によつても、そのころ、同志社と寺町まで、御所は塀も垣もない草原で自由に行来していたとのことであります。新島先生は御所の方から歩いて同志社へ這入るとき掃除をしている五平に逢うたびに、必ず帽子を脱ぎ「五平さん、御苦労さん」と挨拶されたといふ。その新島先生の優しい謙虚な態度をたびたび実際に見たといふ井上善吉（岩本博民氏の実父活泉翁）は新島先生のお姿に感激の涙が出たといふことを少年時代の博民氏にいくたびか語りきかせたといふことであります。

五平さんというと、彼が、書生の無礼粗暴をたしなめたことが語り伝えられ、そのことだけが伝説化しているのでありますが、五平さんを知っている蘇峰も井上活泉も口をそろ

えて、五平さんは無私誠実で、ただ新島先生と同志社のために献身的に奉仕することしか知らない男であつた。この校僕は月給のことなど、テンデ問題にしていなかつた、ということを博民氏に語りきかせたとのことであります。安部磯雄の語るところによりますと、五平さんは、何事か要求するところがあつたので新島先生の宅を訪問したことがあつた。先生は五平さんを応接間に案内してその要求するところに静かに耳を傾けていたとのことでありますが、これは新島先生の平民主義の徹底していたところであり、五平さんも同志社のためには先生を訪ねたことでありましよう。

6

わたくしは、ここで五平さんのことについて語り、五平さんの新島先生と同志社への献身的生涯を回顧したのでありますが、当時の小使であり、雑役夫であり、庭掃除人であり、門番であつた五平さんは、一人の立派な教育家でもあつたのです。教育家といふのは、教壇で高尚な善いことを、美しい言葉で語る人のことではありません。日常の生徒たちの悪

戯や生意気な思いついた態度をもたしなめる勇氣と正義感を持つ人でなければなりません。

当時、広告楽隊とか、ヒロメヤとか、いうものがあり、わたくしにも少年時代にそうした記憶がありますが、五平さんは、短小の身をもつてよく進んで生徒に近づき前に述べたように口笛を上手に吹き、タライを叩いて、生徒を集め、何か懸河の弁を振るい、いわゆる流行の演説をくさりやり、それを終ると、再び口笛を吹き、タライを叩き生徒と合奏し、五平さんが先頭に立って行進をし、生徒はその後をつづいて行進して楽しんでという微笑ましい話も伝えられています。五平さんの弁説はいつも正義の声と諷刺であり、悪いことをする生徒は、五平さんに頭があがらなかつたとのことであります。地位も身分も低い、名譽もない。権力などはおろかお金も無い。知識とあるわけでもない。身体的にも一寸法師とか、エスキモーとか嘲笑されたこともありました。そして何ものもこの世につけるものを望んでいない。ただ新島先生を尊敬し、同志社と生徒を愛し、そのために献身的に生涯を送り、年老いて五平さんは病

の床につきました。同志社病院で死の病に呻吟して居た時、またしても響く彰栄館の鐘の音を聴く毎に『私は学校へ行く』と言つて、恰かも鐘の音に呼ばれたもののごとく起ち上がろうとしたという。同志社——新島先生の同志社に五平さんは「魅せられたる魂」そのものであつたといえるのであります。

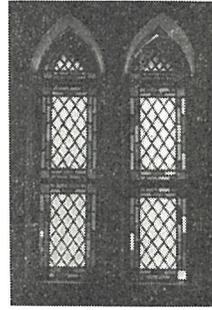
昭和三十二年、徳富蘇峰翁、九十二歳に同志社を訪れたとき、大塚節治総長やその他の同志社人と新島先生の墓参のため、若王子山頂に登りました。墓参の後、帰りに大塚総長が入口の傍らにつつましく立つ小さい墓を指して、これが五平さんの墓ですと指すと、老蘇峰翁は、近づいてなつかしうに墓石の上に手をやって撫でたとのことであります。若木博民氏はこの劇的な生きたシーンを感激してわたくしに教えて下さつたのであります。その老蘇峰翁もいまは亡く、同じ新島先生の塋域に、五平さんとともに永き眠りについでおります。

人間の価値とか幸福とかいうものは、いうまでもなく地位や権力や名譽や富財や、空しい評判やその他、この世につけるものできめられるものではありません。わたくしは同志

社に来て、数多くのすぐれた人びと、立派な人びと、尊敬すべき人びと、愛慕すべき人びとを知つたことを一生の幸いと思つておりますが、校僕であつた松本五平さんは、そのような人びととともに人生の生甲斐ということをおたくしに反省させ、意識させてくれた一人であります。五平さんは生きて新島先生を識り、先生と同志社のために誠実に献身して人間としての使命を果した幸福な、価値ある人生を生きた人であります。VENI・YIDI・VICI 来・観・勝というジュリアス・シーザーの言葉を「われ世に生れ来り、新島先生を観、かくて世に勝てり」というようにわたくし流に解釈して、五平さんこそ、かく堂々と言いうる人であると羨ましく思つておるものであります。(総長)

* 本年九十五歳の先盟校友足利武千代翁は、相国寺の塚家であり、足利幕臣二十六代の当主であつて、相国寺から京極小学校へ通つていた。毎朝のように御所の構内の草原で同志社へ通われている新島先生に逢い、この人が偉い新島先生かと思つていねいにお辭儀をする。先生は帽子をとつて、この少年にいていねいに礼を返したという。武千代少年はそれが嬉しくつて時間を見計らつては御所のあたりで新島先生にお辭儀をした。その後、武千代少年は新島先生を慕つて同志社へ入学するということになつたが、相国寺最大の塚家の坊やが邪宗ヤソ教の学校へ入学するとは大変なことだといふので大分モメたが、武千代少年は断乎として寺の反対を押し切つて新島先生の同志社へ入つたといふことをわたくしは翁から直接に聞きました。

神の場合、人間の場合



1

私は同志社出ではない。数度講演などにいったことはあるが、教職の関係もない只の京都市民である。

でも「東の福沢、西の新島」と、この地に新島先生の魂の墓地があり、同志社があることを誇りに思っている。新島精神こそ「地上の星」だと信じているからである。

私は曾て「新島裏物語」という長編を「都新聞」に連載したことがあった。そして八年

真下五一

ほど前、これを出版するにあたって「地上の星」という題名をつけたのであった。

「一粒の麦」または「麦は大地に」としようかなど色々考えたが、結局「地上の星」に着いたのであった。その本の「あとがき」にも書いてるように「空気は放射能でだけ、宇宙には人工衛星が飛び交っているが、逆にこの地上のことはすっかり置忘れられているのが現状ではなからうか。……」は、八年後の今日にもそのまま言えることである。そして、「……この物語は、そうした迷いの中で、やむにやまれぬ私の祈りが、迸り出たほんの貧しい片鱗に過ぎないのだが、この大愛の精神こそは、空に乱れ飛ぶ星と共に輝く、

地上の星として、永遠に消えることはないであろう。……」星のまたたく夜、若王子山頂にて」と記しているから、夜ひそかに私は先生の墓前に祈りつつこれを書いたものであらう。

この長い物語は、ちょうどその若王子山頂から初まっているのである。新人生が「智、徳、体の校章の意味はもうわかった。そやけん、校祖ちゅうたら、あら何じゃ」と放言したことから上級生と大喧嘩になって、墓前ではでな立廻りを演ずる。そこへ曾て新島先生から救いを受けたことのある老人が墓掃除にやってきて、この学生たちの争いを沈め、論しつつ先生の思い出を語りはじめるという筋のものである。

校祖を知らぬ学生なんて一人もいないぞと叱られるかもしれないが、小説だと思つて勘弁していただく。でも校祖を知つていてもその精神をまだ吞込んでいない学生はあるのではなからうか。精神は知つていても、まだ身につけていない者、実行に欠ける人は相当存在するのではなからうか。

こんなことも門外漢だからズケズケ言えるのかもしれないが、その門外漢の言として却

つて参考にもなるころあらば幸い。析角の御依頼の原稿に失礼を重ねて恐縮だが、このあとの枚数も門外漢らしい小言で終始さしてもらつて責を果たさうと思う。先生について、あつた事をあつたように語つてみても、それは既に皆十二分に承知のことだからである。

2

さて、その第一の小言であるが、先生を余り神格化し過ぎないでほしいと思うことである。それは古い日の事ではあるが、私が昔、講演に行つた際も、その直前に注意があり、八重子夫人の不行跡のことについては語らないでほしいと一本釘をさされることがあつた。また先の「地上の星」出版の際にも、この著は堅い伝記と違つて読みやすく、一般にも大いに益するところがあると理解して当時の大塚総長は快く序文まで寄せて下さつたが、他の当局者たちから「夫人のことで少し訂正してもらえないか」と大分注文をつけられたことがあつた。

教育の場だけにその気持は解らぬではないが、然し、それでは少し読みが浅いのではないかと私は疑ぐるのである。臭い物に蓋式の

教育では決して真物は生まれ育たない。いつか真を知り、その反動がきた場合には逆に悪影響の方が勝つてくる結果にもなる。

皆承知のように八重子はなかなかの女丈夫で、白虎隊が若松城外に奮戦し、形勢非なるを悟つて飯盛山に自害し果てた時、後ろ鉢巻姿の男装に身をやつした八重子は砲煙彈雨の真直中に自若として大砲方の指揮にあつたのであつた。

その反面また女紅場で女生徒を相手に、やさしく裁縫を教えるという。当時の秀でた新女性ではあつたのだが、夫の裏が亡くなつてからは、まことに目に余る素行が続いたのである。

山林などの財もいつの間にか売払われて、みな派手な身飾り等に変わり、そして最後に残つた寺町の家さえも消え失せんばかりになつたので、遂に徳富猪一郎ら同志社を案ずる人々が計つて最後の手術をほどこして安泰に保存したことは承知の通りだが、それは財の面でのこと、精神の乱れはもう手術でも効かないほどのものがあるのであつた。いちいち列挙することは差しひかえるとして、女が身を飾りすぎるといふことは、男ほしきにつな

るとみて、八重子の場合もこの例からはずれなかつたのである。裏なき春、若い燕が飛び交うようでは、なるほど教育的ではないであらう。

然しである。八重子は裏の妻であつたとしても裏自身ではないのである。それほど乱れをよびやすい女性でも、裏の許にある時は、まことに健気な良き夫人だったのである。それをみても、むしろ如何に裏の包容力が豊かで偉大であつたかがわかるのである。

私は、であればこそ裏の心に一層撃たれたのであつて決して八重子の後年の乱れのために新島精神が欠けてみえたことなど少しもないのである。もともと私は新島裏を神とは思つていないからである。私と同じ人間だと思えばこそ、かくも尊敬しているのであつて、このことはクリストについてさえ、そう思うのである。クリストを神と説かれると、もう私は近づけない。クリストも神の子であり、つまり人間であつたということを、前面に出された時、却つて偉大さを悟り、近づきたい思いがするのである。

新島裏についても、これに以た思ひは、言

わず語らずの内に今日の学生には何か、心のしこりとして存在するのではなからうか。余り人格化するのには、むしろ非教育的だとする私の考えは、これらの点に由来するのである。

3

それから序にも一つ、新島襄をまた余り私有物視するのもよくないと考えるのである。

むろん、新島先生は、同志社の校祖である。福沢諭吉が慶応の校祖である通りである。同志社が先生を愛する余り、先生と同志社を同一にする程の気持もよく解る。いや、その点では、むしろ門外漢の私にも、もっと、現状以上に新島先生を打出して然るべきだとさえ考えている。

然しながら、それでもなお新島襄は野放しにされなければならないと思うのである。日本全体の、むしろ世界の「新島襄」であって、決して一同同志社の「新島襄」ではないからである。襄が、単身日本を脱出し、そして彼の地で学んで帰国した時、むろん具体的には同志社を同志と共に設立したのであったが、それは麦の種子を蒔く畑をここに借りただけで、その種子を次第にひろめ、日本中にその稔り

を結ぶためであった。

そしてそれは学校という畑を通してではなく、その遥かなる夢は日本全土を目にしたとみて当然であろう。

だのに若し同志社が私有物視しすぎては、小さく、殻に閉じこめてしまふ事にもなりかねないし、一粒の麦をひろめる根本の精神にすら、知らず知らずさからっていることにもなるというものであらう。

今日ではそういう狭さがすっかり改良されたから、今更、昔のそれら私有物視の例というようなものもここに取上げる要はないが、心があればそれは必ずどこかで影響をもつものである。他のものが新島襄を語ればこそ、面白くない思いをするのも、そういう目に見えないあらわれの一つであつたらう。

私は曾て愛媛新聞に正岡子規の伝記小説を連載したことがあつた。一千枚におよぶ長編であり、子規の生地からも大いに好評を受けたものであつたが、生前に子規と親交のあつた極堂氏から、「子規を小説にすることはもつてのほかだ」と、きつい抗議があつたものである。

が、当の新聞社が、これについて世論をあ

つめ、そして極堂氏に対して「もう子規も小説に描かれて差支えない年代の人です。それに私有物視することこそ、子規先生の心外とするところでしょう」という意味を打出したことがあつて、この長編は完了したのであつたが、つい身近にあると愛するの余り私有物化が起りやすいものである。だがこの「愛」は新島精神の「大愛」に似ても似つかぬ「小愛」といふべきであらう。そして野放しの大愛こそ、却つて同志社を一層大にするものでもあらう。

4

唯、私もそう思つていふように伝記小説といふものは、よほど慎重でなくてはならないとは考える。世間にはいかに出鱈目の伝記小説が横行していることが、なげかわしく思つている一人だからである。

けれども真摯な筆になつた伝記小説は、伝記では近づけない堅苦しさをほぐして、そして楽しみ読んでいる内に、その真物の精神は狂いなく浸透していく長所を持つていふのである。

それに真実性ということについても、あな

がち伝記や歴史が正しいかというところ、大いに疑問があるのである。私は先に「尾崎行雄物語」も書いたことがあるが、先生の死の一年前「これこそ忘れかけていた自分の生いたちを見せてもらって、とてもうれしかった……」という文と共に、これが多分絶筆らしい「天地の内」の一人の我ありと、夢みし頃の若かりしかなの一幅をもらったことがあった。そして、先生は戸籍面にある生年より本当は一年早く生まれている」という秘密を知らせて下すったものであった。

そういえば私の生年月日は五月五月と戸籍に残っているが、本当は「五一」の名で示されている如く五月一日が本当だという事を母から聞かされたことがあった。だから若し何でも記録通り伝記に綴るとしたら、その伝記こそ誤っておることになるうし、伝記小説で更に真を探り、も一つ秘されたところをひもどけば小説の方こそ正しいということにもなるう。

早い話があの第二次世界大戦中は、日本の放送では勝つてばかりいたものである。若し結果が日本の勝利で終っていたとしたら、そのまま偽の歴史が出来ていたことになるので

あろう。

だから、そういう意味からも私は「子規」を書き「新島襄」も書いてきたのであった。前者は常に死の前に横たわりながら、常人に勝る仕事をしてきた「意思力極限の人」として、そして後者、新島襄は私の心にはかりでなく、今日の地球上に光をもたらす「地上の星」として、やむにやまれず書いたものであった。

もう枚数が少なくなったので、あとは小さな一つを取上げて結ぶことにするが、新島先生のことを書くとき、いちばん嫌に思った点を告白すると、それは例のステッキで自分の手を打った一場面である。新学期の学年編成がえに、人数の都合で二年前期生と後期生とが合体させられることになった時、猪一郎が上級生が、学校側の態度を一方的だと抗議して無届欠席のストライキを起こした折のことである。新島校長は「今回のことは総て校長としてのわたくしの手落ちから招来した」と、そして「今回の罪人は校長自身である」こと「今その罪人を罰する」ことを告げて、ステッキが折れるまではげしく自らの手を傷

つけたその一件である。

これは人によってはおもってこいの美談みたいに聞こえようが、私には鼻もちならぬジュエチャーにしか取れなかつたのである。

然し、私は新島先生ともあろうう人がと、後でよくよく考え直してみた。その結果、これは当時のその場ではやはり最良の手段であつたと納得ついたことであつた。あれほどの乱れが一瞬にして治まれば、たからでもあるが、新島先生という方は、只の一教育者というだけではなく、事にのぞんでも最も端的な処置法も身につけ、常にも一枚大きく高いところから眺める目を持っていたからだと感じるにいたつたのであつた。自らの一粒の麦を地に落とすばかりでなく、闇の日本に一つでも多くの種子をつくり出さねばならぬ使命の人だつたからである。だから小人物がやった演劇なら、本当に鼻もちならない事であつたらうが、ここまで大きくみると、同じことも根本から違つたものとなつてくるのである。

やはり「地上の星」だけあって、その光りは永遠のものであろうが、でも、どこまでも人間として学び「天上の星」とは化したくないものである。

(作家)

禅話

森本省念

1

禅に関する事柄につきて書けとの御要求ですが、御要求に適する書物がいろいろ出版されていますからその中でよいものを二三紹介いたしますよう。

一、禅 鈴木大拙著・工藤澄子和訳 筑摩書房 これは大拙翁の英文禅論文から要所を抜萃和訳したもので、原英文が外人のためのものですが現代の日本人がよんでも教ええられるものです。

二、禅と精神分析 創元社 この本の最初の部分が鈴木大拙翁のメキシコでなされた「禅仏教に関する講演」です。この部分だけを御読みください。

三、鈴木大拙著 禅堂生活 大蔵出版株式会社 これは英文のものを谷大教授横川顕正氏が和訳したもので、外人に雲水坊主の僧堂修行の実際を紹介したもの、絵入りでよむうちに雲水の生活様式を流れる禅的雰囲気になれるものがあります。処々大拙翁の註があつて教えられます。

四、禅の思想 鈴木大拙選集第二巻 第十二巻にも出ています。

五、無心ということ 同選集第十巻

六、数息観のすすめ 立山英山述 千葉県市川市国府台三丁目二四二〇人間禅道場 三十位の小冊子ですが非常によい本です。

七、原田祖岳述加瀬喜一郎記 これは絶版本、古本によく出ます。

八、禅と人間形成 立田英山著人間禅道場刊。

九、山田無文師坐禅の仕方 神戸市兵庫区五宮町一三七祥福寺真人会

さてこれ等の本でさぐりを入れていよいよ坐禅を実行するにはやはり先達の指導がいります。佐藤幸治著『禅のすすめ』（講談社）の末尾の付録に初心者でも指導してもらえる道場の名と場所が列記してありますから礼を厚くし至誠心で深い心で御願ひして導いて貰う事です。

2

以上は今迄全く禅に縁のなかつた人、同志社の学生さんを相手に書いたのですが、己に

既に禅をやつてられる方でしたら、そのついでおられる師匠さんが然るべき先輩の書物を推薦なさるでしょうが、私は禅修行の友達として次の本をすすめたいです。

○東嶺禪師宗門無尽燈論、これには釈大眉老師提唱筆記本が沼津市中沢田大中寺内、禅道会本部から出ています。

○臨済及臨済録の研究 陸川堆雲

臨済録の研究としては是非ともこの二書は備えるべきで、殊に後者は在来の古註本の集大成であつて、これ以上の解釈は西欧思想との関係の上で我等が創るべきものでしょう。それをやる前は少なくともこの詳解を我等が消化することが必須条件です。

○白隠禪師槐安国語 これは大燈国師語録を白隠禪師が下語されたもの、支那で禅が発達し、それが臨済の系統をまとめられたのが大燈語録で、それを更に発揮したものが槐安国語です。飯田撫隠師提唱録が唯一の提唱本で前記の陸川堆雲師の本と共に寺町三条上ル西側其中堂で売っています。大燈国師の師大応国師の語録は花大の横井聖山師の訓註大応録が其中堂にあります。大応国師の師虚堂智愚禅師の虚堂録は中島鉄心老師の義解がよろし

い。これは全部七冊で第二冊目が九月に出る由、其中堂で求むべし。和訳註解虚堂禪師語録二冊洋装本、これは古本でないと入手し難い。これには龍溪の抄と大観文殊の書き入れとが合して甚便利、但し誤植が多くて困る。碧巖録は黄檗の実統大智の種電抄が可。但し公案禅もその扱い方が時代と共に進展している。同一の公案でも白隠以前と以後とで宗旨が異なる。種電抄は白隠と異なる所あり、この事は曹洞宗の風外禅師の碧巖集耳林抄を見ても出会う事柄です。風外の注もなかなか面白い。同一碧岩集でも曹洞宗の方の注と臨済のとは異なる。面山師の雪竇頌古称提は曹洞の宗旨で見た碧巖集です。明治・大正・昭和の碧巖集講話の類でも曹洞宗師の提唱は大方は面山のこの本をうけついでいます。大内青櫛でも秋野孝道師でも。曹洞宗は悟り、見性を問題としないようですが、実はさに非ずで、この事は道元禅師の書をよめば明瞭です。先ず正法眼蔵をよむこと、よむとは身でよむこと、身心を挙げてよむこと。

○正法眼蔵註解全書十冊は是非とも座右にすること、浅野斧山師の問解で文書をとり参註、私記で宗旨を味い、それを御抄問書で裏づけ

て、弁註、那一宝で味をつけるのです。臨済禅は公案禅となる必然性がある。これで鍛えて行つて道元禅に参する。眼蔵の仮名法語をよんで自己の掌裡の筋を見るがごとくでなかつたらその人の修行は荒々しくて熟してをらぬと思つべし。これと共に永平広録をよむべし。永平広録註解全書三冊が参考になる。前記の眼蔵註解全書にも索引が別冊になつてをる。広録も同様です。これ等みな其中堂が取る。次ぐでしょう。

3

禅は宗旨が五家七宗に別れてをる。その中雲門宗というのが一寸見難いので、この雲門宗等が日本の道元禅に含まれてをる。臨済宗のみはどうしても言語文字概念で論理で表現し得ない。前記の実統大智の碧岩の註も種電抄と言つてをる。禅は生きたもの、それを注記するには生きたものを殺し平面化することになる。撃石火閃電光を紙上に種えつける無理なことなる。その無理なことを道元の眼蔵がやっておるのです。それを支那人のやり方で表現してをるのが雲門の宗旨で、日本の大燈国師は雲門の生れ代りと言われる方で前

記の槐安国語には道元とは異なつた趣の包含——五家七宗の包含が見られます。なお臨濟禪といつても色合いが違つて盤珪禪師の不生禪、鈴木正三の仁王禪。白隠さんは盤珪禪を絶えず心して自分の公案禪を主張しておられます。白隠和尚の提唱を書き入れたものが坊間に存在し、それを引きついで提唱が臨濟系の提唱です。現在の日本の禪としては、白隠、盤珪、道元はどうしても参ずる必要があります。鈴木大拙著『禅宗史の研究第一』岩波書店はこの三者を論じておる唯一の書。なお不生禪につきては鈴木大拙選集に盤珪の不生禪あり一見すべし。南禅寺柴山全慶老師の小論文盤珪禪に見る「身の上の批判」につきて。これは鈴木大拙博士頌寿記念論文集『仏教と文化』に掲載、立派な小論です。さてこの辺まで興味を昂じてくると楞伽經の研究、大乘起信論や華嚴經や法華經や涅槃經や維摩經や般若經へ食指が動くことでしょう。先輩の導きよつて公案禪で山また山と上り下りやうて行くところ等の經典をよむときに非常に役に立つ。偽經であろうが支那製のものだろうがそれを自分のものとするのが出来る。楞伽經(禪家の)はその一例である。同じ仏教でも

真宗や浄土宗は禪とは対蹠的であるがそれがよくうべなえるのです。異は異として認めながらその間に一如の趣を味い得るのである。いわゆる仏法は仏法に非ず一切の法は皆仏法ぢやと謂えて来るのです。鈴木大拙翁が谷大で真宗概論を講じ、妙好人庄松や浅原才市の宗教詩を話される。谷大の学生が伝統の宗学が領解される前に大拙翁の浄土教系仏教に関する理解の文章によつて啓発されて却つて真宗がよくわかると私に告白すること再三ならずです。『心』という雑誌の第二百零号記念特輯の巻頭に安心——禪と真、鈴木大拙を一読すべし。兎に角、師につきて実参実究すること、上記はその実践上の内所話です。

4

参禅弁道をやらずに読んだりきいたりでは境涯が転じませぬ。やはり真つ正直に、心を貧しくして一文不知の愚になつて、言はれた通りに直進することです。道元古仏の正法眼蔵随聞記を見て御覽(岩波文庫本廿頁一三条)随聞記は至道無難禪師集(春秋社)や盤珪禪師語録(岩波文庫終版古本屋に時々出る)と共に座右にせられ度い。実参実究の上に注意

すべきは一師に就いたら他の師につかぬことです。御参考のためにいろいろな書物を列記しましたが、これは一応の紹介でこれ等はよい師がみつかるまでのことで、見つかったらその師の指示に従い、禪書の選択等は師の言に随うべきです。相国寺専門道場や天龍寺僧堂では開山夢窓国師の遺誡をよみます。これには説書のことにつきて厳しき方針が示してあります。夢窓国師の西夜夜話にもそのことが説いてあります。書についてもそうですが師匠を選び好みして一師から他師へと移り行くは尤も忌むべきことであります。人間は皆欠点がある。長く就いておると先輩の欠点が目につき鼻につき嫌悪を催すことも事実です。善い所を視てゆくのです。顔や種姓や階級や世間的の教養の程度なんかは問題とせずにとだ師の上に現顕する法を拜してゆくのです。すると法が自分に流れ入るのです。一切の事物が皆拜めるようになって来ます。それから遍参が問題となり、病は一師一友の処にありと言ふ古人の誠も身にしてみてくる。そこで上記の書物のみならず法財を広く天下に求むべきことになり、FAS協会の仕事も尊き聖業となつてくるのです。達磨東土に來ら

ず二祖西天に征かずと徹した玄沙が却つ方々へ問答に出かけることになるのです。

5

因に、同志社の方が何故私の如き者に禪話を要められるか、新島襄先生が相国寺専門道場の狹野独園禪師を訪問されて御互に默契されるものがあつたとか、あるいは独園禪師が奇妙な質問をされて先生が苦笑されたとか、この類のことを私は新島先生に親しく教を受けた方からきかされます。此類の話は後人の付加や捏造があつて信じ難い。然し先生が独園さんを訪問された事は肯へる。答は問の裡にあり、そこに己に仏教を貫く禪と基督教の尖端を行く新教との出会いがあり相互を結ぶものが厳存してをるではないか、海老名弾正総長さんが新島先生の逸話を旧制中学の会議室でされました。先生は哲学なんかには強い関心を示されず寧ろ地理学とか、自然科学に強い興味を持ってをられたとか、希臘哲学を通さずにイエスさまの御教えから直に禪が飛び出すであろう。新島先生が哲学的なものに深い関心を現わされず単刀直入的に神の愛に直参されたのでないか。それが自づから独

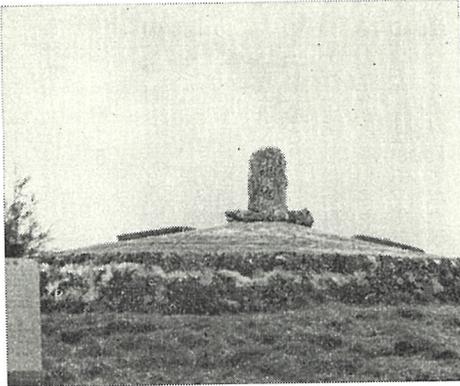
園禪師訪問という姿となつたと私は味うのです。思想は後から出て来る。言語道断心行所滅の生きた奴が大切です。先生の奥様が先生昇天後、京都建仁寺の黙雷禪師と茶道の仲間として交渉があり茶を媒介として禪と基との融和を味われたのも何か目に見えぬ神の御手を感ぜしめましょう。数学の先生弘中又一君は先生の門下生で相国寺僧堂に通参してをられた。同志社大学の哲学科教授今谷逸之助先生は熱心なる参禅家です。その先達は前記の竹田黙雷禪師に師事すること十一年、その選化後は竹田頼川老師に十六年、その御他界後は現建仁寺師家竹田益州老師につきて参禅、その法嗣として建仁僧堂の陰の外護者である内藤潮音老居士です。潮音居士は同志社中学の国漢の先生でした。燈台もと聞し、こんなえらい先生を忘れて、同志社とは縁の薄い私らにこんなつまらないことを書かすとは、編輯部員もどうかしておるわいと思はざるを得ぬのです。これからは禪につきては今谷先生に、さらには内藤潮音老居士に御たづねして下さい。また上記について腑におちぬ点もあらば亦この両先生に御ききください。終に一挿話を加えます。内藤君の御母上の幼な友達

が釈宗演、大拙翁の師匠です。鎌倉円覚寺僧堂の師家たりし時一日一青年が人生問題に悩んだのか、禪師を僧堂にたずね相見して、自己の心境を吐露しそれに対して何等かの解答指示を懇願しました。宗演師は一言も吐かずにつと立ち上り別室に行かれやがて再びやつてこれれ手に新聞紙で包んだものを持ち出して言はく、この本を君に進呈するから下宿へ帰つて初めから終まで注意して読み給え、君の問題は必ずこれで解決し胸中のもやもやは屹度雲散霧消するだろう、と。青年は喜んでその贈り物をおし頂きあつく一礼をして引き下がった。歩きながら解封閲読も軽率だから下宿でそれを開いたら古ぼけた雑誌で而も婦人雑誌である。表紙から目次本文広告隅から隅まで目を通したが少しも深刻なる高遠なる人生宗教問題に関する一行も見当らない。あるいは自分の読み方が悪いのかと繰り返してよんだ。一杯喰わされたわいと、自分の愚かさ、自己の煩悶などは甘いものだとか心が落ちつくに従つてわかつたとのこと、これは本人持田狂介から私がかきかされた話です。呵々。

(元中学講師・長岡禪塾)

沖繩

— 戦後二十年 —



慰霊塔—沖繩の各地にある

我喜屋良一

日本は祖国か!!

首里城址の高台に構内をもつ琉球大学の西南、南島の蒼穹が碧瑠璃の東支那海に溶けてむ彼方には、さいはての水平線がゆるやかな弧をえがいて南北にひろがり、この海空をバツクにした眼下の那覇市は二十六万の人口を擁して、一見、こともなげにたたずんでいる。戦塵はれて二十年、焦土と化した近郊の山膚にもようやく翠緑がよみがえり、市の中心部には々奇蹟の一哩々と呼ばれる殷賑の地帯さえ現出した。京の四条河原町に比肩すると誇張していわぬまでも、一見、地方中都市の面目を少くともおもてむきには保っている

感じである。戦前、郷土画家が好んで描いた朱瓦と漆喰の屋根は、大方、ビル谷間に姿を没し、私の少年時代の記憶にのこる苦むした石垣がブロック塀に姿をかえて家々を区切り、南国を象徴する深緑の榕樹（ガジマル）も影をひそめて柳の街路樹に場所をゆずっている風情は、むしろ没個性的ですらある。しかし、スラックスやシャツ・トパンツに草履ばかりの軽装でショッピングを楽しむ家族づれの外人の姿がことさらに目立ち、左側を走るはずのバスやタクシーがこぞって右側を往來し、琉球絣や島産の漆器・陶器をあきなう民芸品店よりも舶來のゴルフ用具・貴金属・宝石・酒類を扱う店の方が々おみやげ品店々としての中を利かして々観光旅行団の皆様大歓迎の看板をみよかしに並べたてている風景は、本土からの来訪者の目を戸惑わせるに充分であるらしい。々基地の町々と呼ばれる沖縄本島中部のコザ市——ほんらい胡差の地名があるのだが、簡明をモットーとして改称したという、その片仮名の呼名からして、基地オキナワにふさわしい——になると、この傾向は一段と顕著である。那覇やコザに代表される沖縄の都市は戦争を境にして伝統的個性

を失い、ただに画一的新興都市に生まれかわつたにとどまらず、沖繩自体がいられた戦後の特殊事情を反映して、このような奇態の数々を住民生活の各面にさらけ出しているのである。

これをしも国際色ゆたかといえれば聞えは良くなるが、元沖繩県庁跡にできた琉球政府第一庁舎の三、四階は、その実、米国民政府職員執務場に占有されて屋上には星条旗がひるがえつていたり、児童・生徒の教科書は府県並みの文部省検定済のものであつて、算数で習うお金の単位はもちろん日本円であり、社会科でも日本国憲法を勉強したりするのであるが、日常の通貨は米ドルで、住民生活を律する最高法規が大統領行政命令であつたりする。だから、「われわれは日本国民として」という前文を沖繩教育基本法のなかにとり入れることを施政権者から二度にわたつて断わられながら、三度目にはやつと実現するという全教職員努力にもかかわらず、何かの折に親につれられて上京し、たまたま米国外使館前をよぎつた際、「あつ、あそこに沖繩の旗が！」と大発見をしたように叫ぶ小学生が出てきたり、新聞の投書欄で「日本は祖国か！」

とひらき直る高校生が現われたりする。木に竹を接ぐ生活様式の所産であるが、問題はそれどころではない。

中部の嘉手納飛行場基地周辺の小学校では、正味四十五分の授業時間中、八十五ホーン以上の爆音で授業を中断して師弟の立往生する回数が三十回に及ぶのは普通で、年間授業総時数の十分の一ないし八分の一を失つていくというのが現状である。地元紙に「ゼロチャンネル」という読者のコラムがあつて、先日「南西の風、ところによりトレーラー落下」というのがでた。南西云々は南西諸島すなわち沖繩の意味であろうが、後半は去る六月、これも中部の読谷米軍飛行場で行つた予告なしの落下傘降下演習で、自宅付近のみちばたに空からふつてきた米軍の小型トレーラー車でひきずられて死亡した小学女児童の惨劇に対する諷刺である。類例は枚挙にいとまがない。爆風で民家の窓ガラスが破損する、催涙ガスが忽然と流れこむ、砲弾がおちる等々、守札の邦、うるま島、の別名がこの地に不自然でなくゆきわたつていた往時には夢想だにしえなかつた不祥事が、住民の都度々々の抗議・要請・陳情をよそにあとを断た

ない。戦勝国民的感覚のなかで、日本々々との区別したこの地への占領者意識が、いわゆる未必の故意に類するこれら一連の不幸を生みだしているとするのは、果して沖繩に生きる者のみの僻目であらうか。

低い生活水準

比較的昔ながらの牧歌調を温存する本島北部の農村や、宮古・八重山の両先島も、この沖繩自体の背負わされた数奇な十字架の運命から自由であるというわけにはいかない。ひとところ国民の注目を浴びた宜野湾市伊佐浜や伊江島の強制土地接収等、軍用基地につながる農業問題もさることながら、琉球政府の農業政策が皆無に近い実情のもとで日々ますますられゆく農民の生活問題は、沖繩農業に固有の死活問題である。農業合理化の掛声かたがた、場当りの技術指導を行っているばかりに琉球政府の施策らしいものはみあたらない。基本施設整備拡充のための補助金は一向に交付されず、山地開発・土地購入・畜舎建設のための資金融資の途もほとんど拓かれていない。農業基本法まがいの保護立法さえ、つくられていないのである。だから農業の副

業化傾向は著しく、他産業との所得格差はひろまる一方である。

農村にくらべれば、都市地域民の生活は、割方、安定しているが、総体的な住民の生活水準は本土各県に遠く及ばない。このほどまとまった琉球政府計画局の資料によれば、現在の住民総所得は二億五千二百四十万ドル（九百八億六千四百万円）で、最下位の鳥取の一億九千四百七十九万ドル（七百一億二千五百万円）の次にランクされているが、鳥取の人口は沖縄の約半分であるから、一人あたりの分配所得ははるかにこれに及ばないことになる。実額は百四十一ドルで、本土最下位の鹿児島は二百六十七ドルをさらに下廻っており、全国平均の僅か五五・九パーセントという低さである。この数字は、いうまでもなく、住民の平均賃金がいかに低いかを物語っている。沖縄では教員の給与は比較的にめぐまれているとみられているが、これでさえ、全国水準にはほど遠い。文部省の資料をもとに、昭和三十八会計年度の本土教員基本給の全国平均をドルで示せば、小学校百十四ドル、中学校百八ドル、高等学校百一ドルとなっている。県によって多少の差はあるが、沖縄と似

た貧乏県をとってみても、みな、百ドルはこす勘定である。同時期の沖縄では、小学八十ドル五十五セント、中学七十九ドル七十四セント、高校八十四ドル七十三セントといった調子で、期末手当も本土の年間三百七十パーセントに対し、二百六十パーセントにすぎず、百十パーセントもの格差がつけられている。比較的めぐまれた教員にしてこのとおりであるから、他は推して知るべきであろう。

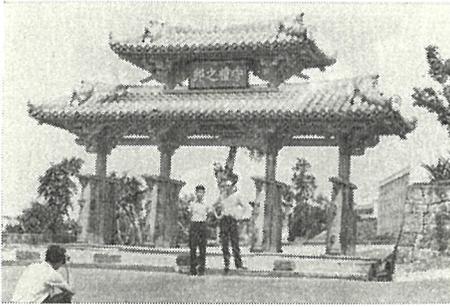
低賃金とさらには、物価の高さは驚くばかりである。那覇の物価が東京にくらべてさえ割高だということは、今日の沖縄では常識となっている。生産財はいうまでもなく、日常必需品のほとんどを本土をはじめ海外からの輸入に頼っているのが主な原因である。私事にわたって恐縮であるが、昨年四月から今年の三月まで、文部省幹旋のかたちで琉大予算による内地研修の機会を得て、同志社でお世話を頂いた。家族同伴で北白川のあるアパートに間借をしたのだが、「物価が高い」とこぼす周囲のひとたちのぐちがどうしてもピンとこなかった。十余年まえの学生々活を想い出してみると高くなっているのは事実である。しかし、日頃、沖縄の低賃金と高物価の

苦汁をなめさせられ続けている者の目からみれば、賃金の上昇に伴う消費者物価の高騰という日本の現実（？）も実感としては受けとれず、正直なところ、むしろ「何ともの、が安いのだろう」という、羨望の気持が先に立ったのである。紙巾がないので多くの具体例はひけないが、私の生活になくてかなわぬ、図書、ひとつをとりあげても、定価三百六十円の本が、沖縄では一ドルではなくてドル二十セント、すなわち四百三十二円と、二割高いのが公定（？）相場なのである。

この低賃金・高物価に追いつちをかけた住民生活がなじがらめになっている曲者が税金である。とくに所得税がひどい。かりに那覇市で標準五人世帯を支える中間サラリーマンの年間総所得を約千五百ドルとみたばあい、このようなひとが年間百三十四ドルもの所得税を納めさせられているのである。これが本土であれば僅か九分の一の十四ドル余りで済むのである。基礎控除・配偶者控除・扶養控除等の諸控除額の低さと税率の高さ、およびその累進度の厳しさによるものである。

悲願 祖国復帰

低賃金・高物価・高祖税と並んで、住民生活に最後の一手を与えているのが、社会保障・社会福祉施策の乏しさである。沖繩では、従来、生活保護制度以外に社会保障らしいものが見あたらず、しかもこの生活保護のなまめをなす保護基準が住民一般の低賃金と政府予算の制約をうけて、極度のお粗末さという有様であった。最近ようやく失業保険と労災保険が実施されるようになったが、一九五五年以来懸案の医療保険は、年々、政府構想が



守礼の門

猫の目のように変わり、いまなお目の目を見るにいたっていない。最近、琉球立法院の文教社会委員会で、被用者保険の私たちで出発して将来は全住民に及

ぼす努力をするという行政府の奇妙な法案と与党の単独審議で全面的にうけいれて本会議に上程したが、内容的にも現金給付方式をとっていたり、財政面でも政府負担率が低すぎる等の大きな問題点を残しているため、市町村会・県労協・婦連・青協・教職員会・中小企業連合会等々の住民諸団体側からの猛烈な反対にあつて、七月現在、審議は中断された恰好である。

太平洋戦争終焉の地としての運命を余儀なく担わされた沖繩の住民は文字通り廢墟のなかから立上つて今日に至つたが、対日平和条約なつて満十三年、祖国の主権回復とひきかえに自らの施政を興民族の手にゆだねることを強要され、本土在任者の想いをこえた苦難の十字架を背負い続けさせられている。いふところの「沖繩問題」の抜本的解決が沖繩の祖国復帰以外にありえないことは贅言を要しない。ただ、領土権も住民の国籍も依然として日本に保有されており、返還を要するものは施政権のみであるから、「復帰」といふ方は、表現自体としては、やや誤解をまねくきらいがないでもない。「極東において脅

威と緊張の状態が続く限り……」という、今の米国側の言明に對して、沖繩の内外で、施政権を基地管理権から分離して日本に返還して貰いたいとの提案があり、これをめぐつて賛否両論が交わされている。一方、すでに三年余もまえに公けにされた施政権者のお墨付「琉球新政策」のいわゆる「本土の相当地域（類似県）並み水準」が本土復帰に備えての到達目標とされ、昨年発足の日米協議委員会にその具体的推進機能が与えられるに至つた。当面、経済・民生・教育の各面のレヴェル・アップを重要施策としてとりあげる動きをみせており、琉球政府は、目下、住民の衆目をあつめて必要資料の蒐集・整備に余念がない。住民はこの施策にさしあたつては生活の新機軸をひらくものとして期待をよせる一方、永い眼でみればそれが沖繩の不明確な地位の固定化に拍車をかける逆機能を担うことになりはしないかという危惧の念をも抱いている。

戦後二十年、昔ながらに澄みわたる南国の海空に馴染むいとまなく、住民の心境いよいよ複雑な昨今の沖繩ではある。

（昭三三文学修士・琉球大学助教授）

私の同志社時代

渡瀬亮輔



同志社時報編集部から時報原稿の依頼を受けたことは、私には意外であった。思いがけないことと申すのほかはない。が、そうかといつて、これが見当りがいの依頼であるとか、私が当惑したとかというのでは、毛頭ない。むしろ、同志社はよくぞ私のようなものまでも記憶にとどめていてくれ、そうして、唯一の広報機関である『同志社時報』に拙稿掲載の機会を与えられたものと、私は異常な感

激をさえ覚えているのである。その次の次第をこれから書かせていただくわけであるが、この場合ちょっと編集者におことわり申しておきたいことは、この拙文が時報原稿としては、どうやらそぐねないものになりそうだという懸念、これである。ところで、私に対する注文としては、同志社に関すること、乃至は、マスコミ、世論、航空等に関することとなつてはいるが、私は、やはり同志社に関する遠いむかしの回想から書き起してみたいのだ。なるほど、私は、三十年以上も毎日新聞

社の禄を食み、社会部・政治部・海外特派員などの第一線取材記者をつとめ、その間、縦軍記者も経験した。外勤をはなれてからは、編集主幹、主筆などと担当して経営にも参加した。また、新聞社をやめてからは、放送事業に転じて、いまだにマスコミを捨てきれずにいる。だから、新聞や世論について何か書けと言われるなら、あながち書けないこともない。それから航空、これは私が現在日本航空協会の監事という肩書を見て、編集者が思いつかれたテーマだろうと想像されるが、この方面の知識はゼロで、ご辞退申すの他はない。日本航空協会は戦後改組されて完全に民間の経営に移され、故郷古澤氏が初代の会長に推されたとき、たまたま私が毎月新聞の編集主幹であったため、朝日、読売の代表者とともに、監事の役を仰せつかり、それが今日まで続いているというにすぎない。そんなわけで、航空を語る資格は、私にはない。

こうした次第であるから、時報原稿としていちばんふさわしそうなのは、マスコミに關し、あえて老記者の立場から寸言を寄せることであるが、何だかいつこうに気がすすまない。それというのも、私が第一線で働いてい

た頃の新聞と今日の新聞とは、僅か七、八年のことで、おどろくべき変化をとげたからである。それは、編集・営業・印刷の各分野にわたって、細かく指摘し得ることであるが、同時に、新聞記者そのものの生體も別人のごとく変貌している。私もたまたま古巣の毎日新聞社を訪れるが、第一に眼につくのは、何と云っても機械化である。もちろん、他の製造会社のように徹底したオートメ化コンピューター化は、新聞生産の特殊性のために望むべくもないが、それでも、印刷、編集の関連作業が以前とは比較にならぬスピードを伴って機械化されている。編集局の中に立つて、私はただとまどうばかりだ。編集の内容も変わった。日目の紙面を一見してわかるように、記事が著るしく解説的になっている。したがって、記事が専門化されたと言えるだろう。昔は新聞記者の資格として、九粗一精と言われたが、今日はその反対の勉強が要求される。社会も高度化したから、新聞は常に一步社会に先じて高度化せねばならぬ。勢い、記者は、専門的の知識を身につけないと、仕事にならない。昔のように、おでん酒を飲んで大言壮語ばかりではおれない。日常の仕事面にお

けるこうした要請は、当然にいわゆる記者気質を変えてしまった。私は、近頃の若い記者たちと話していると、年だけでなく、その考え方において、世事に対する知識において、はたまたその生活態度において、いかにも自分が老記者になったとの感を深うするのが常である。しかし一方、新聞はニュースの速報性を、ラジオ、テレビに奪われた。この事実から来る記者の変化も見逃し得ない。これは、記事だけでなく写真についても同様だ。したがって、新聞の写真班もまた、センスの動きが變つて来なければならぬ。なぜなら、第一報はテレビで発射されてしまうから、新聞紙面に出る写真の構図は、おのずから異なる角度で捉えるのが当然だからだ。この点から、新聞社が直接A・MかF・Mを持ちたがるのに当り前で、この七、八年間のニュース取材面、新聞製作面における進歩は、私たちの時代に比して、殆んど隔世の感がある。

さて、思わずもいまさらの新聞談義をしてみました。とにかく、右のような次第で、私には、今日マスコミを論ずる資格は、すこぶ乏しい。で、これから「私の同志社時代」を書かせていただく。

2

最初に「私の同志社時代」は、いかにして始まったか。始まりはしたものの、その時期がいかに短かいものであったか。そのような事実を明らかにすれば、私がここに「同志社時代」などという表現を用いるのもややオーバーだし、編集者としても、そんなことから、そのような題名で時報に掲載するのはどうやら筋力がいだったと考えられるかも知れない。しかし、私は正直に申しあげるが、たとえ私の同志社時代がいかに短かかろうとも、また、その短かい間に、私の携わった仕事がいかにささやかなものであったとしても、私は、ともかくも同志社という由緒ある私学の一角に籍を置いたその感激と感謝は、今に至るまですこしも衰えないのみならず、年をとり、そしてその頃の悪童が、いまや私といつこうに變らない白髪、禿頭で現われ、昔どおりに、私をつかまえて「先生」と呼んでくれる喜びは、実に無上のものと称して、いささかも誇張でないのだ。だが、これは私だけの、本当は心の奥にしまっておくべき小

さい宝なのだ。これは人前に公開して、見てもらったり、況んや見せびらかせたりするよ
うな「宝」ではないかも知れぬ。とは言いな
がら、やはり問われたら、すこしづつ取り出
して語りたい気持もある。青春の回想は、年
老いて独り机に枯坐するとき、または何か突
然、底知れぬ孤独感に襲われ、それがたそが
れの人生と結びついて寂寥堪えがたきとき、
ひそかに追憶の翼にのせて、眼目の間に楽し
む玩具なのだ。このような玩具は、誰しも持
っていることだろう。私も、同志社中学の僅
か八ヵ月足らずの講師の時代として、持つて
いる。

今から思うと、不思議な縁だった。大正十
四年、私は東大政治学科を卒業はしたが、狙
った就職先は見事に振られた。満鉄東京調査
局がそれだった。しかし、私の身辺事情は遊
民徒食を許さず、生計は自分の責任で立てね
ばならなかった。満鉄入社をしくじった私
は、これに機会に京都に行き、かねて憧れて
いた河上肇博士の経済学講座を聴講したいと
考え、京都での就職を思いつき、思案の末、
牧師の父に乞うて、当時同志社総長をしてお
られた海老名弾正先生の紹介状を貰い、飄

然、同志社総長室を訪れた。これが、同志社
と結びついた縁であった。海老名先生は、
ずい分迷惑されたことだったろう。先生は、
まだ学生服の私を見て、こんなことを言われ
た。

「君は大学で政治学を勉強したようだが、何
か学生に教えられるかね」

私は、ヘタな謙遜は禁物と考えて、大自信
をもって返事をした。

「はい、何でも教えられます」

「ほう、それでは学長に来てもらおう」

「先生、それは大学でしょうか、予科でしょ
うか」

「なに、中学の方だよ」

正直なところ、私はすこしがっかりした
が、(イヤ、まさか数学や物理ではあるまい。
何とかなるだろう)と腹の中で計算をたて
た。やがて、末光学長先生が総長室に入っ
て来られた。海老名総長からの紹介で、末光先
生はすこし考えておられたが、何でも、歴史
と法制の先生が病欠しているから臨時でよけ
れば講師として来てもらってもよい、という
話だった。

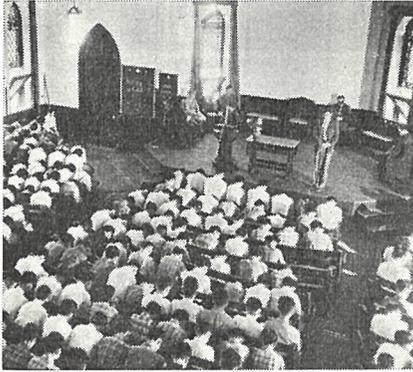
「じゃあ、君、歴史が教えられるかね」

「はい、大丈夫でございます」
と、こうした珍問答の末、両先生の御好意に
より、かくして同志社中学講師ができたがっ
たわけである。

これが四月の新学期、そして私は、これも
お許しをえて、授業の合い間を見ては京都大
学に行き、河上肇博士の経済学講座を聴講し
たのであった。当時の河上博士は、第二貧乏
物語を出版される前であつたが、すでにマル
クス学徒として労働価値学説を採り、その講
義も資本論を基礎とされていたようだが、ま
だどこか人道主義的な思想の匂いが漂よい、
和服に袴の端然たる姿で演壇に立たれ、満場
立錫の余地なく、しんと沈まり返つた階段式
円形の教室を時折見渡されつつ、低声で朗読
調の講義をされた。使用価値と交換価値を説
明されるあたり、ロンドンの霧の朝を描いた
有名なターナーの画などを例にひき、博士独
特の流れるような名調子の講義は、今も私の
耳朶にある。

3

さて、同志社中学、まだ背広を持ってない私
は、セルに小倉袴という書生姿で、五年の日



本史は、今もある彰栄館の二階教室に、三年の東洋史は、彰栄館の右斜め横の教室に、颯爽？として通つたものだ。何分、歴史ときたら、私は今も好きではあるが、当時は中学で習つたあとは、日本史も東洋史ものぞいたこともない。だから、ひそかに教師用の歴史本を手に入れて一夜つけの勉強をし、教壇に立つのである。あるとき、三年の東洋史で、ふと前列を見るとある生徒が私の虎の巻の「教師用」を抜いている。これには冷汗三斗を覚えたが、そ知らぬ顔で「生徒は、そんなものは読まんでよろしい」とやった。油断も

スキもならぬと思つたことだった。

その頃、私は下鴨松ノ木町のうどん屋の二階に下宿していた。五年生の生徒が「先生、遅刻しまっせ」と誘いに来る。一緒に半分走るようにして相国寺の土塀の下を通る。チャペルの鐘が聞える。ファースト、セカンド、それと駆け出す、やっとサードに間に合う。私は、先生方の居並ぶ壇上の末席に腰を下す。「来た、来た」というささやきと低い笑いが二階の座席から聞える。朝のチャペルは、私にとって忘れ難い。

私は、かつて学生の頃、当時政友会の中堅代議士永井柳太郎の、演説であつたか、文章であつたか「彰栄館の鐘の音を聞きつつ、自分同志社に学んだことを誇りとした」という同氏の言葉を覚えている。またこの古い建物、私が最も敬慕する新島襄先生が恐らくはその教壇に立たれて、生徒に詢々と神の愛を説かれたこともあつたと思う。その光景が遠い遠い歴史の霧の中から現われてくる。私は、よくこんなことを想像しながら、たとえ背広も買えない講師ではあつても、この幾變遷の歴史の、昔のついた彰栄館の石段を上るわが身の光栄をかえりみたことだった。

当時の生徒——といっても今ではもう孫を持つつよいお爺さんだが、内田治太郎君や千房等君らが、時折、私を訪ねてくれる。少々、テレクさいが、私を今でも「先生」と呼んでくれる。四月から十二月までの八カ月の講師としては、冥加に尽きる話ではないか。

思えば、当時から数えてざつと四十年、わが同志社も大きくなつたものだ。その頃、名は天下に著名だが、実、必らずしも伴わなかつた同志社は、今や名実共に第一流の私学として、子を持つ親の憧憬の学府となつた。時報十五号の巻頭には「同志社に期待する人間像」の特集があるが、注文はたくさんあるだろう。しかし私は、同志社に学ぶ学生として、その時でなくてもよい、年をとつてからでもよい。ただ神を畏れ神を愛する人間になつて欲しいと思う。唯物論者は、とかく神を侮るが、神は侮るべきでない。過ちは幾度も犯しわれながらあいそがつかざるが、この日ごと、私は神から離れざらんことを切に思う。樂しかりし「わが同志社時代」を回想して、ここに雑文を草して責をふさぐ。

(RKB毎日放送副社長)